

Ⅲ 明治期韓国で活躍した外交官・若松兎三郎の生涯(Ⅳ)

永野慎一郎 (Ph.D)

アジア近代化研究所理事・大東文化大学名誉教授

第二故郷朝鮮を離れて京都 に帰る

1902年7月、木浦領事に着任してから25年、1896年3月から1年間の京城公使館勤務を合わせて26年間朝鮮で勤務した。振り返ると人生の最も働き盛りの時期に朝鮮で働き、暮らした。京城を振り出しに、木浦、元山、平壤、釜山、仁川という主要都市において、日本による植民地支配という状況の中で外交官としてまたは高級官吏として働いた。

外交官としての勤務が朝鮮との縁の始まりであったが、これは若松にとっては運命のようなものであった。朝鮮の古い伝統文化を愛し、人間はみんな平等であるという信念のもとで共生のために産業開発に尽力した。いざ朝鮮を離れようとする、様々な思いが錯綜した。

若松兎三郎は妻里うとの間で、3男7女の10人の子宝を儲けた。知的な財産であった。うち次女は7歳の時、チブスに罹り夭死し、三男は生後すぐ亡くなった。長女篤代は京都舞鶴で生まれたが、他の子供は朝鮮で生まれ、朝鮮で育った。子供たちにとって朝鮮は生まれ故郷である。1年

または2年間隔で子供が生まれたので、母親の母乳だけでは足りず、乳母の乳を飲んで育った子もいた。乳母は朝鮮の婦人だったこともある。

大勢の子供たちを連れて第2の故郷朝鮮を離れて1927年に京都に帰った。3年間は下鴨上河原町に住居を構え、京都で退職後の新しい生活を始めた。大家族であったため、1930年5月に真如堂・真正極楽寺から浄土寺馬場町の土地約100坪を借地し邸宅を建てた。家は田んぼに囲まれた閑散とした地域であった。日々の生活は子供たち中心であったが、庭の植木を手入れすることが何よりも楽しみであった。柿の木、無花果の木、スモモの木、リンゴの木など、朝鮮での懐かしい思い出の多い果樹ばかりである。また畑に野菜をつくるなど農作業も楽しんだ。

同志社大学校友会長として

活躍する

時間的に余裕ができた若松は母校同志社大学に出入りしているうちに、同志社校友会長石川芳次郎に誘われ、1929年から校友会副会長として石川会長を補佐した。

1938年5月、石川会長任期満了に伴う後任会長に選任された。1947年3月まで会長として校友会運営に携わった。その間、同志社大学常任理事を務める一方、牧野虎治総長より教務部長事務嘱託を要請され、牧野総長を補佐した。

1940年6月、同志社大学文学部再編をめぐって文学部教授会が荒れていた時、教務部長兼常務理事として文学部長に対し、文学部の赤字を問題にし、講義数が多すぎるとして整理するように迫った。文学部教授会自ら策を立てないなら、自分が手を下し、処理すると申し入れた。若松教務部長としては、既存の神学科、英文科、哲学科のうち、神学科は残し、英文科と哲学科を合併するのが望ましいと考えた。反対意見が強かったが、文化学科という名称で両学科が合併する方向でまとまった。

若松は校友会長の時、学生時代から尊敬した恩師で同志社社長（現在の総長）を務めた下村孝太郎の追憶会を開催した。「下村先生追憶録」の編集後記において次のように書いた。

「私は、下村先生が米国留学より御帰朝に成った直後、同志社において一年間、先生より物理および化学の教を受けました。その時印象つけられた先生の煥発せる英気、烈々たる熱誠、強い意思、け高い気性、それ等が一つになって、先生に対する敬慕の念として、心の底に残されたのである」

1940年に同志社創立者新島襄没後50周年記念事業が企画された。若松は熱海の別荘で静養中の

徳富蘇峰に新島襄50年忌に際し、記念事業を企画しているが、先輩のご意見を伺いたいと書簡を送った。直ちに返信が届いた。校友会会長若松は牧野総長と共に熱海の徳富邸に訪問し、相談した結果、新島襄の遺品展覧会および記念講演会を東京で開催することとなった。これは徳富翁の発意によるもので、自らも進んで講師として演壇に立つことも約束された。

日本橋高島屋楼上で開催された遺品展覧会には多数の参観者があったばかりでなく、東久邇宮殿下のご来臨を賜り、また日比谷公会堂における徳富蘇峰と永井柳太郎の講演会は盛会であった。

併せて、『新島先生記念集』および『新島先生書簡集』が同志社校友会編で刊行された。『新島先生記念集』には、特に、徳富蘇峰、浮田和民、安部磯雄、深井英五等の同志社に縁のある人の原稿も揃えた。若松は校友会長として編集後記を書き、また、『新島先生記念集』に「先生の至情」と題して恩師新島襄との思い出話を紹介した。

若松兎三郎は同志社で学んだことを誇りにし、このことは終生忘れることなく、晩年少しでも大学の発展のために役立ちたいと、大学経営に参加し、尽力した。同志社を愛する生粋の同志社人であった。

在日朝鮮人の人権擁護に尽

力する

戦時中、在日朝鮮人は警察官に圧迫されて進退の自由を失ってい

た。所用があり、一時的に朝鮮に帰った人が、日本に家族が残っていても再び日本に戻ることは許されなかった。多くの朝鮮人が若松をたずね、官憲に取り成してくれよう依頼した。若松は人道上的こととして、知事や警察部長、処々の警察署に出頭し、事情を説明して再来日できるように取詰めた。

当時、在日朝鮮人渡航管理制度があり、「内鮮一体」と言いながら、日本に来ている朝鮮人は故郷への自由往来が事実上制限されていた。「一時帰鮮証明」を警察当局が交付した。一時帰鮮証明は支障なしと認められるものに限り、就業地所轄警察において発行された。交付の手続きは帰国前の雇用主の下において同一職業に従事することを宣誓し、雇用主連署の上就業地所轄警察署に写真二枚を添付して申請する仕組みであった。再来日の期限は1か月以内（のちに2か月に延長）であった。

何かの事情で所用を期限内に済まされず、「一時帰鮮証明」の期限が切れてしまうと、再渡日できなくなるケースが多くあった。生計を共にする家族が日本に残っていても容赦なく、残された家族は途方に暮れてしまった。一時帰鮮証明申請の条件が厳しく、相当な経済力があっても交付されず、雇用主が朝鮮人の場合は取得が困難であった。

この制度に関して、朝鮮総督より拓務大臣宛「朝鮮人の内地渡航制限に関する件」（1938年3月23日）の書簡で「内鮮一体の政策実現上一大障害となりつつある」と

指摘された。

人道主義思想が身につけていた若松は、自分の故郷を自由に往来できないのは間違っていると認識し、困っている在日朝鮮人たちの相談相手となり、知事や警察部長に面談して善処するよう要望した。

朝鮮人教会建設への協力とアービン宣教師

京都西院に米国宣教師アービン夫人の寄付で建設した朝鮮人教会がある。その教会を警察署が使用許可しなかった。朝鮮人キリスト教信者たちの依頼を受け、若松は知事や警察部長に使用許可を要請した。その際、京都府警特高課から「あまりその問題にかかわることは貴下のためにならないからやめた方がいい」と勧告された。

アービン夫人は、同志社大学音楽教授をしながら宣教活動をしていた。大韓基督教京都教会に出席した時、朝鮮人信者たちが献金を集めて教会敷地を購入したと聞いて感銘を受けた。また、信者たちの祈りに感銘し、数日間、神様に祈り、在日朝鮮人の安息の場所をつくり、彼らが安心して礼拝できるようにすることが自分の任務であるとの啓示をうけた。アービン夫人は離婚の時もらった慰謝料全額を教会建築献金として神様に捧げた。それは彼女が生きていくのに必要な生活資金であった。しかし、アービン夫人は神様からいただいたものなので、神様が必要としている教会建築献金としてお返しするのですと自らを慰労した。

自分を宣教師として派遣した米

国長老会宣教本部に書簡を送り、また通っていた教会や親族にも、朝鮮において生活基盤を奪われ生きるために渡日した朝鮮人たちの状況を説明した。事情を知った米国の教会や親族たちが教会建設費を集めて送ってくれた。

アービン夫人は米国からの教会建築献金を当教会に伝達した。担当牧師は「アービン宣教師が一万五千元を教会建築のために献金した」と教会の信者たちに報告した。

京都朝鮮人教会の信者たちも立ち上った。外国人宣教師、それも女性が巨額の建築献金を捧げたことに感動し進んで金を集め、日曜日の礼拝が終ると工事を手伝った。毎日のように工事現場に顔を出していたアービン夫人は天使のように見えた。

京都韓国教会には、アービン宣教師を祈念する記念石がある。教会の定礎に「IRVIN CHAPEL FOR KOREANS 1935 A.D.」と刻まれている。

戦時中、国民すべてが戦争に巻き込まれ、言論の自由や良心の自由が奪われていた時期であることを考えると、このような時代にもグローバルマインドを持った勇気ある日本の知識人がいたことは一粒の良心として記憶に留めるに値する。

若松家の人々との出会い

2013年暮に古家を買って内装・修繕したら、屋根裏から「施主若松兎三郎 昭和5年」と書かれた棟札が出てきたと、米国籍で

京都博物館国際交流担当フェローのリンネ マリサさんが知らしてくれました。

若松兎三郎に関する資料を保管しているはずの遺族に辿りつけず、途方に暮れていた時、親切なリンネさんのメール連絡があった。同時に京都で画廊を経営している星野桂三さんの厚意で直系子孫にも連絡がとれるようになった。浄土寺馬場町の家で育ち、50年前に引っ越したというお孫さんたちも合流して初顔合わせとなった。7月の真夏の暑い日、歴史的な由緒ある邸宅に新旧居住者と研究者が一堂に集まる珍しい出会いであった。リンネさんは日本人のご主人と愛娘の3人暮らしで、建築して82年経過した古家を買って、内装や修繕して居住している。日本人以上に日本文化を愛護している研究者である。近くの真如堂の一角にある若松家の墓地にも墓参した。

この時の直系子孫との出会いが若松兎三郎研究をさらに進めた。若松兎三郎が遺族に残した経歴書『自己を語る』を入手したのだ。長年にわたり探していた貴重な史料である。これがなかったら、恐らく若松兎三郎の業績は埋もれたままになって、歴史から消えていたに違いない。

『自己を語る』は兎三郎が亡くなる3年前の1950年に作成され、家族だけに配布された。若松は目が不自由であったので、自ら執筆できず、口述して長女篤世に筆記させた。そもそも篤世の長男健一郎(初孫)が結婚することになり、若松家の素性を明らかにしておく

必要があるとして思いついたまま口述して筆記させた経緯がある。

長女篤世への愛情

若松 兎三郎は子供たちの教育には非常に熱心であった。すべての子女に高等教育を受けさせた。自分の子女だけでなく、甥や孫にも教育に必要な学費の援助を惜しまなかった。家庭環境に恵まれなかった孫たちを呼び寄せ同居させ、英語や国語などを教えるなど英才教育した。孫たちの教育が隠居後の楽しみであった。そのために親に不幸なことが起こっても一族の子供たちは兎三郎の財政的な支援および指導により高等教育を受けられ自立の土台を作り、困難極まる戦時および終戦直後においても生計維持が可能であった。また、一族が栄える大きな要因であった。

長女篤世は京都舞鶴の母の実家で生まれた。木浦領事赴任時に父母と一緒に朝鮮半島に渡った。5歳までは木浦で暮らし、父親の転勤で元山・平壤・釜山に移動した。兎三郎が釜山府尹時代に篤世は銀行員であった川村建雄と結婚し、二人の男子を産んだ。夫川村が早死したので、兎三郎は不幸な篤世の子供たちを呼び寄せて同居させ、篤世には茶道教師として身を立てさせた。兎三郎から学費の援助を受けて、長男健一郎は京都で中学を卒業し、旧制山口高校を経て、京都大学法学部に進学した。卒業後、日本特殊製鋼に勤務した。次男雄二郎は名古屋高等工業学校を卒業し、東洋道路に入り、工事部長を勤めた。

兎三郎は長女篤世には父親として特別に愛情を注いだ。小さい時からピアノなど習いものをさせるなど、他の子供にはない扱いをした。子供が多くなると均等に愛情を注ぐことは困難だが、篤世は最初の子であったので特別に可愛かった。

次女齊子は木浦で生まれたが、平壤でチフスに罹り、7歳でこの世を去った。当時の医療技術ではどうしようもなく、命を落とした。

三女緑と娘婿岡本神草画伯の夭折

三女緑は、木浦領事勤務時の1905年に木浦で生まれた。仁川女学校を卒業して日本女子大学家政科に進学した。美人で、頭が良く、成績も良い自慢の子であった。仁川女学校時代には全朝鮮テニス大会チャンピオンの腕前であった。美・文・武を備える優秀な娘であった。

緑は日本女子大学で松本亦太郎教授の美学講義を聴くうちに、画家を志すようになった。大学卒業後、京都に戻り、松本教授の紹介で菊池契月画塾に入門した。画家をめざし、年に一度開催される菊池塾展にも出品した。最初の出品作は妹高子をモデルに描いた〈壺を持っている女〉であった。

そのうち、画塾の先輩画家岡本神草と交際が始まった。二人は恋仲となり、結婚話が進行したが、岡本神草は既婚者であったため、若松家は全員結婚には反対した。

しかし、愛娘の頼みには弱い兎三郎は結局しかるべき法的手続きを済ませた上で結婚を許した。そして二人のためにアトリエ付住居を建てて与えた。

1931年8月、家族の反対の中で、岡本神草と若松緑は挙式を挙げた。神草37歳、緑26歳であった。緑はその後肺結核に罹り、病弱であったため、実家に戻り養生していた。

岡本神草は1932年10月、第13回帝展に〈婦女遊戯〉を出品して入選した。〈婦女遊戯〉は1933年の朝日新聞社カレンダーに採用された。また帝国ホテルのクリスマスカードに採用された。神草は人気が出始めた矢先の1933年2月に脳溢血で急逝した。享年38歳である。それから6か月後に緑も28歳で病没した。

二人の早死に最も悲しんだのは父兎三郎であった。神草と緑の墓を真如堂の若松家墓地の一角に建てた。神草のアトリエは処分し作品は若松家に引き取られた。

青年作家岡本神草は絵の世界から完全に忘れられていた頃の1985年秋、神草の作品〈挙の舞妓〉が65年ぶりに京都の美術品交換会に出品された。この交換会が岡本神草の作品が評価を受ける契機となった。

競りが始まり、神草の〈挙の舞妓〉が紹介されると、数人から「あっ、出たっ！」という声が上がった。〈挙の舞妓〉は、舞妓がじゃんけん遊びに興じる特異な画面であるから、京都の画商なら誰でも記憶に残っていた。大正期の作品

をメインテーマとしている画廊経営者星野桂三は「これだ」と真っ先に手を上げた。数人の美術商が「いっぽん！」と声をかけた。「一本」とは、競りでの意地の張り合いを止めて、ある程度の競り値になると、競り合うのを止め、抽選で決着を付けることを意味する。抽選に当たった業者は外れた業者たちにいくらかの金額を支払う仕組みだ。これを利付というが、利付を当てにして「一本」に参加する人も結構いる。本当に欲しい業者に作品が渡るとは限らない。

結局、6人が「一本」に参加し、星野は抽選から外れてしまった。がっかりして肩を落としていた時、老舗の美術店の社長が「あの作品はあんたのところの方が生きるさかいな。わしにまかしとき」と慰めてくれた。その社長の計らいで、2か月後、〈挙の舞妓〉は星野画廊に届いた。

〈挙の舞妓〉は岡本神草が1920年の第3回国画創作協会展に出品した〈挙を打てる三人の舞妓の習作〉と同一であることがその後の調査で確認された。

1986年秋、京都国立近代美術館の新装開館記念展「京都の日本画1910～1930」のポスターと記念図録の表紙絵に岡本神草の〈挙の舞妓〉が採用され、世間の評判となった。この事実を伝え聞いた緑の実妹の糸屋高子が星野画廊を訪問し、岡本神草の遺品があるという情報を提供した。

帝展入選作〈婦女の遊戯〉は大きすぎて買い手がつかず、若松家が引き取ったものの、家の中に入

れることは不可能であった。そのため、家の裏の軒先に油紙に包んで吊るして保管していた。これを知った兎三郎の長男逸は大学時代の友人である朝日新聞記者（のちの社長）広岡知男に朝日新聞カレンダーに採用された縁もあることから購入を依頼した。広岡は絵が大きすぎて朝日新聞社にも飾る場所はないが、事情を理解し同社の倉庫にでも入れておけば絵が劣化するのを防げるとして、朝日新聞社に買いとってもらった。1935年の新大阪ホテル（現リーガロイヤルホテル）開業の時、朝日新聞社から開業記念に同ホテルに寄贈された。当初は岡本神草の作品として同ホテルのロビーに飾られていた。その後、リーガロイヤルホテル大阪の美術倉庫に別の作家の作品として保管されていた。岡本神草の再評価を契機にその作品が岡本神草の〈婦女の遊戯〉と確認され、同ホテルのラウンジの壁面に再び戻された。作者紹介文には次のように書かれている。

岡本神草（1894～1933） 神戸生まれ。京都市立美術工芸学校卒業後、同立絵画専門学校に進学。卒業後すぐ国画創作協会展に卒業制作「口紅」を出品して入選、その妖艶で誇張された女性像によって評判となった。作品はいずれも浮世絵などを参照した濃艶な雰囲気的女性像で、成熟した女性の美しさや舞妓の持つ人工的美しさの根底にある神秘さ、宗教的な感じを表現することを求め、独自の作風を示

している。「婦女遊戯」は昭和7年第13回帝展に入選した作品。帝展に出品され人気を呼んだが、その後所在不明となっていたもので、当社が購入した時には全く別の作家の作品とされていた。昭和63年になって岡本画伯の作品であることが判明し話題となった幻の大作。

その他の作品は高子が保管していたが、これを機会に公開されることになり、岡本神草の作品の一部と関係資料は京都国立近代美術館に寄贈され、同美術館に保管されている。

1988年2月14日、NHK日曜美術館で、「岡本神草一大正の日本画・妖艶の舞妓」が放送され、岡本神草の名が全国ネットワークで広がった。2005年11月26日、「美の巨人たち、岡本神草～拳を打てる三人の舞妓～」がテレビ東京系列で放送された。

夭折した画家岡本神草の作品に目を付け、絵の世界に再び呼び戻し、評価の契機を作ったのは京都の画商星野桂三であった。星野は2008年6月14日～7月12日、「没後75年夭折の日本画家・岡本神草〈拳の舞妓〉への軌跡展」を星野画廊で開催した。

夭折した画家・幻の画家として世間から忘れ去られていた青年画家の作品を再び絵の世界に登場させ、大正期を代表する日本画家として評価を受けるようになるまでは星野桂三の緻密な努力があってこそ可能であった。岡本神草の再評価は義父若松兎三郎への亡き神草の恩返しでもあった。

四女モミヂと高須家の医師

ファミリー

四女モミヂは1906年に木浦で生まれた。女の子ばかりの4番目であったので、注目度が低く、衣服はお下がりがばかりだった。モミヂは負けず嫌いで頑張り屋であった。小学校の時の運動会ではいつも断トツで一等になるほど走りが得意であった。一本に編んだお下げをふりながら突進していく様子を兎三郎と里うは来賓席から見てわが子のあっぱれな活躍にご満悦であった。

モミヂは仁川女学校卒業し、姉緑同様、日本女子大学に進学した。モミヂは目白の大学寮に入ることになり、東京駅から目白の寮まで人力車で行ったことは一生忘れなかった。モミヂは行動力があり、寮生活においても後輩たちの面倒見がよく慕われた。華族のお姫様と同室にさせられたこともあった。

モミヂは医学生の高須正夫と京都教会で結婚式を挙げた。高須正夫の父直一と兎三郎が共通の知人であった牧師の紹介で二人は結ばれた。

高須正夫は愛媛県生まれで、京都府立医科大学を卒業し、大阪住友病院耳鼻咽喉科に勤務していたが、日中戦争に軍医として応召した。帰還後、京都市伏見区丹波橋に高須耳鼻咽喉科医院を開業した。

正夫は手先が器用で手術が得意であった。長女怜子が小学校5年の時、自宅の傍の街路で友達と遊

んでいた時のことである。反対方向からパラソルをさして歩いてくる女の人を避けるために路の脇の方へ進路を変えたところ、たまたま脇の方に立っていた男が腰に挿していた手鉤（先の鋭く尖った手鉤）の先が真っ向から怜子の鼻にあたり、鼻に裂傷を負うでき事があった。その男の助けを受けながら慌てて自宅に帰ると、正夫は直ちに細い糸で縫い始めた。耳鼻咽喉科医師として細かい手術をたくさんこなしていたし、また、軍医として多くの戦傷患者を扱ってきた経験があったので、手術には自信があったが、それにしてもこれから嫁入り前の娘の鼻先の創傷を縫うことは大変なプレッシャーであった。正夫は落ち着きを取り戻し、細い糸を半分に割いてさらに細くし、縫い始めた。途中、緊張をほぐすために赤ワインを飲みながら、慎重に丹念に縫い針を進め縫い終えた時はほっとした面持ちであった。結果は上々で、父親として医師としての面目を保った。怜子の鼻は後々になっても形を保ち、傷跡も縫い針の後もよく見ないと分からないほどに完全に治った。正夫の敏捷な処置によって怜子の鼻は大きな傷も残らず回復した。

正夫は大東亜戦争勃発で軍医として再度応召し、インドネシアのジャワ島で5年間暮らした。ジャワ島では戦病兵療養所長として勤務した。終戦後オランダ軍捕虜として一年間抑留された。晩年に妻モミヂと共にキリスト教に入信した。

正夫とモミヂの間で二男一女を儲けた。モミヂは努力家で子供の教育には殊更熱心であった。正夫が二度も戦争に応召し、7年間の留守の間、モミヂは実家の支援があったとしても女手一つで三人の子供を立派に養育した。

長女怜子は同志社女子大学英文科を卒業し、京都大学化学研究所助教授石割隆太郎に嫁いだ。隆太郎は奈良女子大学理学部教授・名誉教授を経て、近畿大学教授を勤めた著名な学者である。

怜子は父正夫が帰還した時の感想について短歌4首を交えて次のようなエッセイを書いて発表した。

「父の帰還」

車窓過ぐる青田の戦ぎ眺め
つつ戦中戦後の思い出紡げり

私の戦争の記憶は小学校一年生の夏、父の応召に始まる。弟と父の両脇に手を繋がれ故郷の伊予波止浜の駅への一本道を沢山の幟や旗の先頭に立って歩いたこと、日の丸の小旗と萬歳の声に送られ汽車が出て行く時のえも言われぬ感情は忘れることはない。

「死ナナイデ」汗の滲み入る
千人針の父に捧げし吾が幼な
文字

後になって戦地から持ち帰った千人針に精一杯心の丈を書いていた自分を知り、胸が痛む。

意も知らず父口写しに歌いたる「青葉の笛」の調べよ哀し
音楽を愛し、テニス・写真・碁などにも長けていた父の再度の

応召は太平洋戦争勃発の直前、医院を開業してやっと一年目のことだった。何カ月か経ちジャワから父の手紙が届いた。ジャワはまだ平和で父の媒介で現地の子供と片仮名の手紙や贈物を交換したこともあった。終戦の前年辺りから音信が途絶えた。敗戦後はオランダ軍の俘虜に。終戦翌年の夏のある日、突然電報が届いた。

重き長靴引き摺るように駅の
段下り来る老兵は洗面器肩に

それが待ちに待っていた四十一歳の父の姿だった。しかも私は成長期で父の妹と間違われ、下の弟は父を「小父ちゃん」と呼ぶ始末。父は医院を再開したが暑い南洋の地での捕虜生活や心労のせいか間もなく胃潰瘍で吐血し、しばらく診療を休み代診に任せた。元来朗らかな人であったのに余り語らなくなっていた。

一方銃後を守った母は口に出さぬ人であった丈にその苦労は言い表せない。弟も学童疎開を余儀なくさせられたし、私は出征家族の稲刈りの手伝いや学校工場での木工仕事に精出した。自分の意志などほとんど通じなかった。

京都は戦禍と無縁に思われがちだが、私のいた伏見は大阪爆撃の通り道に当り機銃掃射や空中戦にも遭遇したのであった。

(美研インターナショナル編『今モ、同じ空』第二集より)

長男高須俊明は東京大学医学部を卒業し、東京大学医学部講師・

付属病院神経内科外来医長を勤めた後、日本大学医学部神経内科教授、日本大学板橋病院副院長を勤めた後、定年退職し、名誉教授となった。

高須俊明は『酒と健康』(岩波書店)、『よくわかる お酒と体のサイエンス』(廣済堂出版)、『頭痛』(岩波書店)など著書があり、学会においても日本神経治療学会理事、日本神経感染学会理事長、厚生省遅発性ウイルス感染調査研究班長など勤め、特に、スモン患者に見られる緑毛舌の発見はスモン原因を解明する端緒となった。

次男高須健次は京都大学医学部を卒業し、静岡県立静岡総合病院神経内科長を経て、静岡市呉服町に高須神経内科医院を開業している。

戦時中および終戦直後の厳しい状況において子供たちの成育の大事な時期に夫を戦争に取られながらも、女性一人で子供たちを立派に養育し、二人の息子を東京大学医学部および京都大学医学部に進学させたのはモミヂの献身的な努力の賜物であった。そのモミヂを陰で支援してくれた愛媛で医院を開業していた義兄勇や兎三郎の家族愛も見逃せない。

高須正夫の父直一は、岡山医学校(岡山大学医学部前身)時代にキリスト教に入信した生涯のクリスチャンであった。医学生時代人体解剖をして、ヒトの体の精妙さに驚き、これは神が造られたとしか思えないと感じたのがキリスト教入信の動機であった。そのため実家から勘当され、学費以外の

援助はもらえなかった。直一は日清戦争の時、姫路日本赤十字病院に勤務し、そこで知り合った篤志看護婦保坂クニと結ばれた。郷里の愛媛県越智郡波止浜町(現在の今治市波止浜)に高須医院を開業した。傍ら波止浜教会に所属して教会活動した。晩年は東京居住の長女保持寿満子宅で滞在し、90歳を超えて天寿を全うした。米寿の時、子孫約30名に新約聖書の表紙裏に直一とクニの写真を貼った上、その傍に「この書は偉大なる書なり」と添え書きして配布した。

高須家は医師8人の医師ファミリーである。他に大学教授や弁護士などがある。

若松家を継いだ男たち

若松家に待ちに待った男の子がようやく生まれた。5人目の出産であったので、家族が集まって、不安を抱えて見守っていた瞬間であった。助産婦が大きな声で叫んだ。

「男のお子さんの誕生です！」
「おめでとうございます！」

助産婦さんの声にほっとして歓声が上がった。集まった家族はみんな大喜び。最も喜んだのは産母の里うであった。里うの眼には涙がこぼれた。言うまでもなく嬉しい涙である。男の子が生まれな限り妻としての責任を果たせないと思うのが当時の社会的風潮であった。それを意識しないわけにはいかなかったから、口にこそ出さなかったけれども、里うは苦しい立場であった。若松家の跡取りが

できて、役目を果たせるようになり、里うはひと安心した。

若松家の長男が生まれたのだ。兎三郎は長男逸を溺愛した。逸はみんなに注目されながら、粛々と育った。その分、逸にとってはプレッシャーでもあった。

北朝鮮地域の咸鏡南道元山で生まれた逸は、父親の転勤で、幼少時は平壤と釜山で育ち、釜山と仁川で小学校時代を過ごした。兎三郎は子供たちの教育に特別な情熱を持っていた。殊に男の子は最高の教育を受けさせ、世界で活躍する人材として育て上げることが夢であった。自分が果たせなかった夢を子供に託そうとして幼少時から英才教育を始めた。

長男逸にその夢を託すべく小学校の時から自ら家庭教師となり英語を教えた。その成果あって、逸が仁川小学校を卒業した時は、英語力が相当なレベルに達していた。京城中学校に入学し、自身満々の逸は英語の時間を楽しみにしていた。ところが、ABCから習う中学校1年生の英語の授業は、逸にとってはレベルが低く過ぎてつまらなかった。馬鹿らしくなって勉強しなくなった。さらに京城中学校では寄宿舎に入っていたが、寄宿舎の中で「いじめ」を受け、精神的な不安定から勉強をしなくなり、中学校3年生の時の成績は劣等生の部類であった。

この頃、逸は病気になり(結核)、兎三郎は京城で医院を開業している知人の内田医師のところに連れて行き、診療してもらった。内田医師の息子は逸と同級生で秀才で

あった。その弟たちもみんな優秀な秀才一家であった。

内田医師は、寄宿舎の食事は栄養が不足しているのでは、逸の健康のために自分の家に下宿することを勧めた。逸の成績低下を心配していた兎三郎は内田医師の心遣いに感謝し内田家に下宿させた。

内田家に下宿した逸は、内田家の秀才たちに囲まれて勉強に熱中することになり、もともと頭は良かったので、その成果が直ちに表われた。4年生の2学期には優等生の仲間に入った。5年生の時はさらに成績が上がり、京城中学校卒業し、熊本の旧制第五高校に進学した。

兎三郎が仁川米豆取引所社長として経済的にも豊かな時代であった。逸に「大学卒業したら、英国の名門オックスフォードか、ケンブリッジに留学させる」と約束したが、昭和大恐慌の所為でこの約束は実現されなかった。

逸は五高では陸上部に入り、主将を務め、400m走でインターハイにも出場した。さらに七高との定期戦で、選手不足から専門外の800m走を急遽走ることになり、きつい練習に付いていけず、何度もギブアップしようとしたが、主将の責任感から最後まで頑張り通し、試合で完走した。その経験は戦後の会社経営の困難を乗り越える時に大いに役立った。

逸は東京大学経済学部にて現役で合格した。翌年、五高時代の同級生で野球部主将の広岡知男が1浪で東京大学法学部に入学した。広岡は朝日新聞社長を10年間務め

た著名な言論人で生涯の親友であった。高校の時から名選手だった広岡は入学するとすぐ野球部に入り、逸を野球部のマネージャーに誘った。逸は2年、3年の時にマネージャーを務めた。広岡は2年から主将になり、広岡主将・若松マネージャー時代もあった。

逸は東京大学卒業後、朝鮮殖産銀行に入行した。入行3年後に拓銀重役の紹介で、朝鮮銀行総裁松原純一の長女保子と結婚した。保子は朝鮮銀行総裁の長女というだけでなく、美人であったので、彼女との結婚を逸は誇りとした。それもあって病弱な彼女を生涯いたわった。

松原純一は島根県出身で、神戸高等商業学校（神戸大学の前身）卒業後、朝鮮銀行東京支店に入行し、同銀行の理事、副総裁を経て、満州興業銀行設立に参加し、副総裁を務めた後、第7代朝鮮銀行総裁（1937～1942年）となった。総裁退任後は朝鮮商工会議所会頭を務めた。

逸は朝鮮殖産銀行において順調に昇進し、特殊金融部長の時に終戦となった。この時、妻保子は京城で脳脊髄膜炎にかかり、九死に一生を得た。難病から回復したばかりの保子と2歳児の長女道子を抱え、7歳の長男逸を連れて、一家4人は貨物列車で釜山まで漸くたどり着き、釜山から貨物船に乗って引き揚げた。この時も逸は悠々としていて、釜山港で引き揚げられる日本人が船を待っている時にも、家族と離れて拓銀の釜山支店に行き、旧知の韓国人行員と夜遅

くまで酒を飲んだ。朝鮮生まれの朝鮮育ちであった逸は韓国人行員とも仲が良かった。その時も韓国人たちの心の広さに感心し、逸は将来の韓国発展を信じていた。

引き揚げ後は京都浄土寺馬場町の父親の家に身を寄せてから、暫くして大阪に出て行き、事業を始めたが、紆余曲折があった。1954年に電線卸売業の大阪石田電材を設立し、これを基盤にして、M&Aにより事業を拡張した。1956年には道路舗装業大日本アスファルト工業（株）を買収して傘下に収め、1965年には旭国際ゴルフ倶楽部が建設する数か所のゴルフ場を建設施工するようになり、大日本建設（株）と改名した。この時、ゴルフ場設計のため、1968年に土木設計会社を買収して若松設計コンサルタントとした。大日本建設は1976年に売却した。

逸は経営不振に陥っていた会社を買収して、傘下に収め、若松グループを拡大した。そのために経営再建の名人と言われていた。

バブルが弾けてからは、土木建設業が成長する時代は終わったとして、経済環境がまだ良い電気関係のエレコン（株）だけ残し、他は売却して経営を集中させ、同社を長男正身に譲った。

また、朝鮮殖産銀行の日本国内資産で設立した殖銀（株）が経営に行き詰まった時、拓銀時代の上司に要請され、社長に就任して再建させた。社会活動としては、関西第五高校同窓会長、関西京城中学校同窓会長などを務めた。

逸と保子の間で二人の子供が生

まれた。長男正身は釜山で生まれ、父親の勤務先の関係で京城に移し、鍾路小学校2年生の時に終戦となり、家族と一緒に引き揚げた。引き揚げ後は祖父兎三郎宅に同居していたため、直系子孫である正身は兎三郎から直接教育を受けた。敗戦の混乱な時期に引き揚げるなど移動に時間がかかり、京都に定住が決まり、小学校に通学を開始した時は、2年生の3学期に進んでいた。授業について行くのが大変困難であった。それを知った兎三郎は、国語の本を2年生用から6年生用までそろえて、早朝および休日に読書と漢字の書き取りを教え、さらに算数の九九テーブルの暗記を教えた。その成果が表われ、学業の遅れは間もなく取戻した。

正身は大阪市立大学を卒業後、父親所有の会社経営に参加し、ダイアス(株)、若松興産(株)の社長を勤めた。現在は、エレコン株式会社の社長である。正身は草田満美と結婚した。満美は大阪市立大学卒業後、一級建築士の資格を取得し、エレコン株式会社の専務執行役員として経営に参加している。

長女道子は京城で生まれ、1歳の時、家族とともに引き揚げた。小学校1年の時に結核にかかり休学した。兎三郎は自宅に呼び寄せ休養させながら、小学校6年生までの国語教科書を取り寄せて、読み書きを教え、また算数の九九の掛け算を教えた。

教育熱心な祖父のおかげで孫たちは引き揚げ後の環境変化に適應できず、学業に支障を来し、困っ

ている時に自ら家庭教師となり、誠実に指導したため、成績の遅れはすぐ戻され、安心して学業に取り組んだ。

引き続き二人目の男子志廣が生まれた。平壤で生まれた志廣は釜山で幼少期を過ごした。兄逸と同様、京城中学校を卒業して旧制第五高校に進学した。高校時代は兄逸に影響され、陸上部に入り、主将を務めた。筋骨隆々の選手だった。大阪大学工学部に進学し、冶金工学を専攻した。卒業後、三菱金属に入社した。志廣は秋田県尾去沢の三菱金属鉱業尾去沢鉱山に勤務していたが、三菱金属が北朝鮮清津に製鉄所を建設することになり、技術者として朝鮮に派遣された。

当時、三菱金属はドイツから特許を導入し、粉鉄から製鉄する特殊な製鉄所を朝鮮清津に建設した。志廣はその技術者として赴任し、課長の時に終戦となった。日本の敗戦後、北朝鮮地域はソ連軍が占領した。ソ連軍は志廣に対し、朝鮮人に技術指導するように命じられ、家族と共に抑留されていたが、ソ連軍の撤収によって、1949年によく家族と共に引き揚げた。

帰国後は三菱金属に復帰し、直島の銅精錬所や生野鉱山大阪精錬所に勤務し、桶川工場長を経て、三菱レイノルズアルミ取締役富士裾野工場長を勤めた後、小会社の(株)菱金製作所社長となった。

志廣は妻多美との間で1男5女の6人の子供を儲けた。長女久子は、幼少期に北朝鮮で抑留され、教育も十分に受けられなかった。

引き揚げ後定着するまで約2年間学校に行けず、ついて行くのが大変でずいぶん苦勞した。大阪扇町商業高校を卒業し、本城正彦と結婚した。

唯一の男の子である道広は芝浦工業大学工学部を卒業し、日本新金属(株)に入り、同社製造部次長で退職したが、63歳で亡くなった。道広は高須正夫の妹岡田愛子の長女知子と結婚した。

3 人の娘たちの養育

兎三郎夫妻はさらに女の子三人を出産した。

五女昇子は、釜山で生まれ、幼少期は釜山と仁川で暮らした。同志社女学校を卒業してから、絵を習いたいと希望していたが、兎三郎が緑夫婦のことで懲りたと言って許してくれなかった。昇子は宮城県高鍋市の名門山名重文と結婚した。医師であった重文は戦時応召し復員した。戦時中に苦勞した昇子は戦後に病氣となり、兎三郎の実家で療養した。晩年は長女美也子の夫の勤務先であるバプテスト病院に長期入院の病床生活であった。昇子と山名重文との間で三人の子供がいた。長男山名重久は建築設計士である。長女三矢子は医師林衛と結婚した。林衛は京都バプテストの病院長を勤めている。次女由美子は写真家木村晃造と結婚した。三矢子と由美子は若松兎三郎が1953年に交通事故に遭った時、同居していたので祖父兎三郎の最期を看取った。

六女高子は、京都府立第一高等

女学校卒業後、10代から母里うの勧めで、絵更紗生みの親として知られている故元井三門里先生に師事した。1935年に映画プロデューサー糸屋寿雄と結婚した。絵更紗の同好者と共に全国規模の絵更紗美術協会を作り、初代会長を務めた。絵更紗作家として毎年東京銀座松屋百貨店と大阪三越百貨店で作品展を開催した。

高子は岡本神草・緑の作品を保管し、画商星野桂三に提供して、夭折した画家岡本神草の再評価の契機を与えた。大正期の著名な画家として評価されるようになった影の協力者である。

糸屋寿雄は早稲田大学を中退し、映画の世界に入り、独立映画運動に関わった、社会主義運動史研究の思想家である。1950年に新藤兼人、吉村公三郎らと近代映画協会を設立し、初代社長となった。多くの映画や著作を残した。

主要な著書として、『管野すが』(岩波新書)、『大村益太郎』(中公新書)、『大逆事件』(三一新書)、『幸徳秋水研究』(青木書店)、『幸徳秋水』(三一書房)、『流行歌』(三一書房)などがある。

糸屋寿雄は兎三郎の晩年を見守り話し相手となった。兎三郎はお正月には糸屋宅を訪ね、年頭の祝盃を傾けながら、昔話や国際情勢などについて話すことが楽しみであった。

糸屋寿雄は兎三郎の経歴書『自己を語る』を編集し、「あとがき」で次のように書いた。

京都銀閣寺において自動車事

故のため不慮の死をとげるまで老人は実に頭脳明晰で、記憶の確かな人であった。父母兄弟などの生没の年月日とか、知人の経歴とか、外務省時代の赴任地の地名や些細な事件の記憶など何らのメモも書き残していないにも拘らず一々まことに正確で、その物覚えの良さは驚くばかりである。

また、外交官在職中に貫いた「同志社時代の人道主義的精神は常に随所に光をはなっているようである」と指摘し、「老人は、ヨハネ傳のキリストの最後の説教につねにもっとも深い感激をもっていた。そして自分はこの世に在る間は我なる衣を脱することに朝夕いそしみ、おのが十字架を背負って勇んで主に従わんことを願った」とクリスチャンとしての生き方をのぞかせ、「生涯を清く正しく生き抜いた一明治人の骨の硬さを感じとられる」と書いている。

七女和恵子は、同志社女学校を卒業して、建築家島田正二と結婚した。島田は早稲田大学理工学部建築科を卒業して三座建築設計事務所勤務していたが、31歳で早死した。

子供が8人もいると兄弟や姉妹の中でも性格の違いや顔立ちの違いがある。顔たちが兎三郎に似ているのはモミヂと志廣であり、母里うに似通っているのは篤世、緑、逸、昇子、高子、和恵子であった。性格的に兎三郎は創意性を好み、新しい物好きの反面、気が変わり易いところもあった。勉強しなくても成績の良い閃きのある

子供を好んだ。実直な努力家タイプは軽く見られる傾向があった。子供たちの中でも芸術家肌だったのが緑と高子であった。兎三郎は一芸に秀でた緑や高子を好み、愛情を注いだ。そういうところがあって緑の夫岡本神草は評価した。

妻・里うの死

10人の子供を産み、外交官および官僚生活を全うしている兎三郎を支えながら、子供たちを立派に養育した里うの内助の功は非常に大きい。里うは兎三郎の同志社時代の同級生相馬某の妹である。里うは三女緑が肺結核に罹って実家に戻って療養した時、緑を看病するうちに自らも罹患し、1944年に死去した。享年67歳である。里うは物静かな良妻賢母型であった。歌がうまく、テニスや水泳が好きな社交家であったが、英語で挨拶もできるインテリ婦人であった。

短気な兎三郎が何かのことで怒って火鉢の灰をつかんで里うに投げつけようとした時、鶴の一声「あなた、何をなさるのですか」と叫ぶと兎三郎は灰をつかんだままぶるぶる震えて何もできなかつたとか、また、泥棒が里うのいる部屋の外の廊下を抜き足差し足で通るのに気付いた里うは「誰かえ」と声をかけたので泥棒はしまったと逃げてしまい難を逃した。孫たちは小さい頃、その二つの事件を面白おかしく真似したものだった。里うは兎三郎の釜山府尹時代、愛国婦人会釜山委員会会長を務めるなど活動的であった。兎三郎と苦

樂を共にしながら、子供たちの成長を楽しみにし、養育や教育のために、ひたすら働き、全員片ついたところで、ゆっくり余生を楽しもうとしていた矢先の逝去であった。

母親として沢山の子供を産み、養育に献身し、すべての子供に高等教育を受けさせ、立派に成長させた若松里うと高須クニには明治時代の女性としての気概を感じさせる共通点がある。

不運の交通事故死

兎三郎は時々近所の市場に行って肉や魚などを買って帰り、自ら料理を作って孫たちに食べさせることを喜びとした。この日も日常の買い物の帰りであった。12月2日、真冬で日が暮れるのが早く、気が付いたら暗くなっていた。両眼が不自由な兎三郎は86歳の高齢で耳も聞こえにくくなった。暗くなったので急がなくてとは気が焦っていた。

信号があるわけでもなく、それほど自動車が多い時代ではなかったもので、急いで白川通を横断しようとした。走ってきたトラックとの衝突事故であった。近所の人々が衝突事故を目撃し、若松老人であることが分かり、自宅に運んだ時はもう息を引き取っていた。86歳の運命であった。

しばらくしてから、みすぼらしい若い女性が子供を背負って葬儀中の若松家を訪ねてきて「すみません」「赦して下さい」と泣きながら訴えていた。遺族たちは何のこ

とか分からなかったが、あまりにもみすぼらしい姿であったので、「いいですよ」と帰させた。トラック運転手の妻であった。

晩年の兎三郎老人は里う夫人を先に亡くし、孫たちと暮らしていた。料理を楽しみ、庭の木の手入れをすることが日課であった。まるで農家の農夫の感じであったと同居した孫たちは一様に話している。日曜日は鴨川にあるバプテスト京都教会に通った。

頑固なお祖父さんではあったが、情け深く、優しいところがあった。ある日、朝鮮人の御婆さんが近所で「アイゴ！アイゴ！」と大声で叫んでいた。それを聞いて兎三郎は孫たちに行って事情を聞いてみてと話したことがある。

近くの朝鮮人たちが集まって居住している町でマッコリ（どぶろく）を売っていることを知り、孫たちにマッコリを買いに行かせたりした。朝鮮で飲んでいたマッコリが懐かしかったようである。孫たちの前でマッコリを嬉しそうに飲んでいた。兎三郎にとって朝鮮は第2の故郷であった。郷愁を感じていたのだろう。

葬儀は日本福音ルーテル教会で行われた。同志社大学大塚節治総長をはじめ、大学関係者などが多数出席して故人のご冥福を祈った。生前尊敬し親しくしていた大先輩徳富蘇峰は長文の弔電を送ってくれた。

若松兎三郎は『自己を語る』において晩年の心境をこう語った。

老後の心境を概言すればヨハ

ネ傳 14章の最後の御説教に最も深い感激を有するは初信の時と豪も変わらない。我が魂は主の御導きによってのみ安住の地を得んことを希望し此の世に在る間に我なる衣を脱することに朝夕いそしみたいのと今一つ切実な願いは己のが十字架を負って勇んで主に従わんことである。私の如き老輩の者も自分の為でなく、他のために苦難を負うべ

き要が有る間は生存の意義があると言えよう。他のために苦難が打掛かって来ている其の苦難を切り抜けて安住の地に達することのみ只管希う。其れ以外老の身として世に何等の欲求はない。唯神の造られた生々たる野原に大気を呼吸し日光に浴し、しみじみと恩沢を感謝することを我事としたい。